

緊急時に露わになる人間性

本稿執筆時(3月上旬)と掲載時(4月)の間に、新型コロナに対する日本国内および世界の状況がどう変化しているかはわからない。だが、中国湖北省武漢を皮切りに世界中に感染が拡大した新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、感染症という病気への対応だけでなく、こうした予期せぬ危機に対応する我々の人間性について、様々な深部を意図せずに露わにしている。いくつかの事例を示しつつ、考えてみたい。

1 国会

審議事項はいずれも重要なことだが、延々と「桜」の話が続ける場面を見せられ、支持政党にかかわらず「今はそれどころではないだろう」との印象を受けた国民は多いのではないだろうか。同時に、古い映画のタイトルではないが、今、そこにある危機が「感染症」という目に見えないウイルスであるにもかかわらず、ひとつ所に多人数が集まり討議を行うこと自体が最もハイリスクであることを考えると、信じられないとしか言いようがない。

さらに言えば、そうした中で出された様々な施策について、後出しで声高に批判することは可能だが、それが出来るなら何故、事の優先順位を考慮して、与野党一致した上で正面からまず感染症対策に取り組まなかったのか。少なくとも筆者達、メディアを通じてしか状況がわからない者には、季節外れの「桜」に費やした時間があれば、より有効な手立てが打てたのではないかとの感が否めない。政党にかかわらず、国難に対して協力する姿勢が見えなかった点は、状況判断の甘さだけでなく、普段何を考えて活動しているのかを見事に示している。

2 企業・従業員・家族

海外活動、とくに中国や他のアジア地域と多くのビジネスを抱えている企業は大変である。駐在員を呼び戻してしまえば現地での仕事にならないし、付随同行している家族への対応もある。感染拡大初期にはチャーター機で現地の自国民の帰国手配をしたが、ようやく帰国しても国内での隔離滞在をめぐり心無い発言や報道、そして感染者だけではなく対応をした政府職員にも犠牲者が出ている。

誰もが不安になる中で、一番不安なのは当の感染者あるいは感染可能性が高い人達、そしてその人達と日常業務で接する人達である。報道内容を見る限り、

現場での実務が集中して精神のバランスを崩したようだが、どこかで過剰な負担を現場の特定個人に押しつけたのかどうか、これこそ本当に追求しなければ残された家族はたまらない。

また、自国政府が帰国手配せず、現地に取り残された途上国の留学生などについて、本来の国際協力の立場から言えば、先方が受けるかどうかは別として、何等かの支援・協力の提案があっても良かったのではないかと思う。自分達が帰国するのは安心かもしれないが、現地に残された仲間を思うと複雑な気持ちになることは間違いないであろう。

そして、国内の企業組織内では恐らく何度も対策会議が開かれているのかもしれないが、その場所と方法自体が感染症にとってはハイリスク・ゾーンであることすら我々は忘れがちである。この時期に、いつもの会議室でいつも通り集団会議を実施するとしたら、やはり主催者の「感度」を疑わざるを得ない。

3 日常生活

マスクに象徴される。気が付いてみればどこにでも溢れていたマスクは今や貴重品である。「テンバイ(転売)ヤー」と呼ばれる人達がこの機会に大量に仕入れ高値で売却し、いくら儲けたなどという情報が普通に流れている。普段1箱500円程度のマスクが10倍以上になり、そのような販売を運営サイトが禁止すると、今度は定価を変えずに送料を通常の何倍にもするなど、足元を見た商売が横行している。

一部のSNSでは、マスクを買うためにドラッグストアに並ぶ人達を写す写真が出されている。それ自体はまだ赦せても、そこで並ぶ人達を揶揄するようなコメントを見ると、投稿者やコメントを残す人間の良識を疑わざるを得ない。困っている人を助けるという気持ちがあれば、そのようなものに「いいね！」など付けられないはずだ。どこかに自分は違うという意識があるからこそ、絶対安全圏からのおかしな写真やコメントが氾濫する。

今回のような危機は、普段、ものの見事に美辞麗句や派手な衣装振舞いで覆い隠され、誤解していた人間の本性が如実に表れる。見えなくても困るが、見えてしまうと悩むものは本当に多い。

(宮城大学 教授 三石誠司・みついし せいじ)